

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1988年

ポーランド月報

4月号
(通巻73号)
400円

「連帯」運動と事業活動 Z・ヤナス インタビュー
地の精と革命とトイレットペーパー



「連帯」運動と事業活動.....	3
インタビュー：ズビグニエフ・ヤナス	
ポーランド社会党政治宣言.....	8
地の精と革命とトイレットペーパー.....	10
ヴロツワフの「オレンジ・オルタナティブ」	
ヤルゼルスキ將軍とワレサ「連帯」委員長への公開状.....	17
イエジ・ホルツェル	
ポーランド日誌 1988年1月16日～2月16日.....	18



「楽しいイースターを」

「連帯」運動と事業活動

インタビュー：ズビグニエフ・ヤナス

Solidarity and Business, Interview with Zbigniew Janas
Uncensored Poland News Bulletin, No.4/88, 19 Feb. 1988

【編集部注】ズビグニエフ・ヤナスは「連帯」合法期間中、ウルスス・トラクター工場「連帯」委員長およびワルシャワ地区「連帯」副委員長の要職にあり、ワルシャワ地区「連帯」委員長のズビグニエフ・プヤクの副官的存在だった。戒厳令布告と同時に地下に潜行、3年後の1984年12月に自ら地上に復帰して「連帯」活動を継続している。このインタビューはカトリック系合法紙『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』1988年1月24日号に掲載されたもので、当局の検閲による削除箇所が明示してある。「連帯」運動内部に「市場の経済主体」（岩田昌征、『凡人たちの社会主義』、筑摩書房、147頁）が登場しつつあることを示すものである。

[訳：水谷 駿]

—覚えてはもらえないだろうが、『「連帯」人名録』の作成時に1981年にお会いしたことがある。

ご承知のとおり、あの頃は色々なことがあって。

—当時あなたはウルスス「連帯」——ワルシャワ地区で最も重要な「連帯」組織だった——の仕事に全面的に没頭していた。いつも何かに没頭しているみたいだった。とても精力的な活動家で、政府当局に対する「連帯」の闘いに全力を投入しているという印象だった。

まわりの世界は大きく変わってしまったが、今も「連帯」運動に没頭していることに変わりはない。他の問題にも、だが。

—まず最初に、1981年12月13日以降、あなたの身に起こったことからうかがいたい。

偶然の一致ないし何かの予感に導かれて、あの夜、グダンスクをたつてワルシャワに戻った。プヤクに夜行列車で帰ろうといったのだが、これで逮捕を免れることができた。

—そして地下にもぐった。

今おもうとぞっとするね。初めのうちはまったく孤立していたから。逮捕されなかったのはごく少数で、みんながわれわれを守ってくれることになった。3年間、そこにいたが、その間に1度みんなのおかげで家族に合流できた。今は2歳になる娘はこのときにできたのだよ。

—それで、彼女がいずれあなたを地下から出でくると考えた理由がわかった。

もっと正確に言えば彼女の健康問題〔検閲により削除〕があったのだ。出産前の2、3カ月、誰かが彼女をいつも見ていなければならなかった。私は自分の義務を果たすべきだと考えた。地下に潜って3年と1日目の1984年12月14日、ふらりと家に戻った。また家族や友人と合流できてとてもうれしかったね。しかし地下にとどまった仲間のことを考えると気が滅入ったな。何しろ3年間いっしょだったのだから。それで私は、つかまることになっても、決して何にも署名しないと決心したのだ。

—でも逮捕されなかった。

そうなんだ、妻と2人で覚悟していたのにな。当時2人はとにかくいっしょになりたかったが、どんな代償を払ってでもというわけではない。その結果、私が投獄されれば、友人の助けを借りてつらい時を過ぎねばならないことは彼女もわかっていた。

—地下から出て来て何をやった？

まず最初に昔の連絡を回復した、形は変わったけれどね。それから、戻ってきた翌日ウルススの工場に復職を申請した。もちろんこれは却下された。

—その決定に不服を申し立てた？

文書で請願やら不服申し立て書やらをあちこちに出したが無駄だった。手紙には返事は来なかった。ウルススの当局者は手紙を書くのはやめろと言ってきた。こんなことに返事を出すよりもっと大事な仕事があるのだとか。

—じゃあ生活はどうしていたのか？

ウルススの仲間が助けてくれた。豊かではなかったが、人並みの暮らしはできた。

戒厳令下の生活

—何をやっていたか？

言えないこともあるが、主に将来に備えようとした。たとえば、英語の特訓を受けたり。心の勉強もした。かつては見過してあまり注意を払わなかった問題を自分でもう1度考えなおして見た。そしてわかったのだ、経済問題の重要性を過少評価していたこと、そしてウルスス工場は結局は〔検閲により削除〕だったことをね。1978年から活動していたが、社会問題の解決にあたり経済問題の重要性を過少評価していた。自主管理の重要性も知らなかった。今はもうそんな間違いはいはない。

—でも今はそうした問題はほったらかしだ。

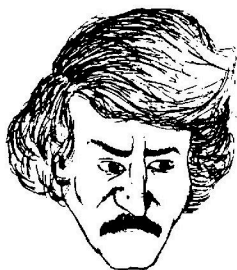
幸いにしてというべきか。状況がすっかり変わってしまったので、今は新しい人が新しい考えを持ち込まねばならない。ウルススでいえば20代の人たちだ、「連帯」合法期やその後の経験に縛られない……。彼らは今日の労働者のことを非常によく知っているし、われわれには思いも浮かばぬ考えを見付け出す。だから私は、ウルススを無罪放免され、他のことをやっている。

—それは何か？

私は今まで1度も何かの問題に全面的に没頭したことはないが、この2、3年は経済問題に専念している。事業の経営だ、それは私にとっては単なる仕事ではなく、1種のゲームなのだが。

—だが、労働組合の指導者であるあなたが事業に向かうなどということがなぜ生じたのか？

答えはごく簡単だ。ウルスス工場の仲間たちで12月14日のストライキで逮捕されて刑期を終えて出て来たのがあるんだが、彼らは元の職場には戻



ズビグニェフ・ヤナス

れなかった。で、何か別の仕事を見付けなければならなかったのさ。もちろん彼らは、ここでは具体的には言えないような活動に参加している。しかしメシは食わなければならない。援助で生活することはできるが、これはあまり快適なことではない。そこでユニツムという名の協同組合を設立したのだ。これは商社になるはずだった——誰も商業活動のイロハも知らなかったがね。でも、彼らには自信があって、その労働が目的にかなうかぎり、どんなに厳しい労働でも引き受ける用意があった。ポーランドで商業活動に従事するのがどんなに難しいか、あなたには想像もつかないだろう。ここでは何であっても売買は難しい。行動力とアイデアと市場の知識をもった専門家を得なければならないのだ。やがて明らかになったことだが、小さな組織ほど、このような協同組合を非常に必要としていたのだ。

—何のためにそれが必要なのか？

生き残るために。われわれが市場の不均衡を利用する、あるいはわれわれのサービスと引き替えにカネをまきあげる、ということではない。われわれのおかげで、これまで仕事のなかった少なか

をすることができる。われわれが置かれた条件の下では、事業家が負担しようとする危険はとくに大きい。

——商店の棚が空であるにもかかわらず？

そうだ。このゲームには不変のルールといったものがなく、われわれもすべて、まだ未経験だからだ。

——しかし、今では多少の経験を積んだはずだ。

たしかに。しかしそれほど多くはない。ウニツムの仕事は1986年10月に始めたが、それまでこの種の活動についてはいかなる経験もなかった。私の唯一の財産は自信だ。……1987年6月までは事実上1銭も稼げなかった。……しかし自信はあった。

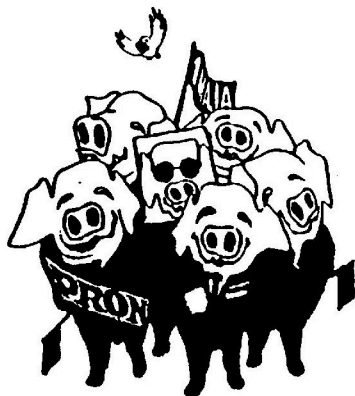
——それは本当に自信だったのか。要するに他に方途がなかったというだけではないのか？

アイデアと勤勉さえあれば、いつかはある程度のごことは実現できるという確信はあった——最も困難な時期を何とかやり過せれば。この期間、何でもできる限り学びとろうとした……。

「連帯」運動と事業活動

——「連帯」の出身者や地下活動の出身者が事業の面でこれほど成功できるなんて、意外ではなかったか。ウルツム以外にも、似たような例がワルシャワにもグダンスクにも、他の都市にもたくさんある。

私にとっては、それはごく自然なことのように思えたね。行動的で知的な人間はいつでも、自分が成功できる場所を見出すものだ。現在事業の世界で大成功を取っている私の仲間たちはみな、かつては優秀な活動家だったし、その前はそれぞれの仕事の最高の働き手だった。……彼らはすべて、最初の成功まで長い間待たなければならなかったが、だからといって誰1人落胆したりはしなかった。彼らはすべて、積極的イニシアチブの持主であると同時に、心理的にも強靱な人たちだ。……今や彼らは、いかにして無数の障害や禁令やいやがらせを乗り越え、いかにして神経がまいらないようにするかを、すっかり心得ている。その秘密は、彼らが——私もそうだが——事業を将来にお



いても非常に有益であるはずの価値ある経験のひとつとみなしていることだ……。

——ちょっと楽観的すぎるように思えるが。

私がかう考えるのは、この1年以上やってきたことがきわめて積極的な意味があると思うからだ。わが国の困難な状況の下でも、何か有益なことが実現できる、とわかったのだ。われわれのグループは大企業と大規模な取引をやっているわけではない。われわれの取引相手の大部分は、国営セクターの中でも条件が最も厳しい小規模な組織である。だがここでわれわれは、国営企業内での仕事の制約にもかかわらず、事業について熟知していて、時には1カ月足らずのうちにまったく新しい製造事業をはじめることのできる真の事業家に何人か出会った。これはきわめて重要な事実である。それは、もし国民に自由に行動する余地が与えられ、障害の体系が解体されるならば、ポーランドはわれわれが想像するよりもずっと早く、今の貧困から抜け出せる、ということの意味する。——そうした人々が進んでよく働くのはなぜだろうか？

カネのためだけではないからおもしろいのだ。

人間は自分がやっていることの重要性を知る必要がある。それにうまくいく企業——たとえ国营企業であっても——を経営することは、はるかに簡単だしはるかにおもしろい。……問題は、現在の体制の下では、経済の分野で何ごとかを達成しようとする者は、いつ何とき監獄にぶちこまれるかもしれないということだ。彼らをひっかけるための法令ならいくらでもころがっている。——そうした事業のために時間を浪費していると感ずることはないのか。

ないね。そんなことを感じた経験は1度もないね。

——誰だって生活して行かなければならないことはわかる。しかし今あなたが言っていることは単なる仕事ではない。それは新しい生き方そのものだ。あなたのこれまでの世界にはあまりびつたりとはこないのではないか。

それは間違っている。世界は同じなのだ。いま私は経済の問題に専念している。しかし、この分野で成功を収めれば、次は別の問題にもっと多くの時間をさくことができるし、それに使うお金も作り出すことができる。

社会活動も事業活動も

——しかし今のところは、犠牲になっているのはあなたの社会的活動だ。

そうは思わないね。いずれにせよ、事業というのは今のポーランドにおいては社会的活動と少なくとも同等の重要性を持っていると考えていることは確かだ。たとえば、幻滅のため海外移住を考えている意欲ある青年たちをこの国につなぎとめておくための唯一の方法はこれだと私は考えている。事業は、意味ある仕事をやり、多少のお金を作り出す現実的チャンスを彼らに与える。国营企業の仕事にはこれがないのだ。その上、事業での成功はさまざまな社会的活動〔以下検閲により削除〕を開始するための機会も与えてくれる。事業をやるもうひとつの積極的な意味はここにある。さらにそれは、社会的プロジェクトに使えだけの十分なお金を残してくれる。

——それはすべて、事業と致富を礼賛するきわめ

で積極的な賛歌のように聞こえる。1980年8月から1981年12月まで主として経済的要求に集中した「連帯」組合員が、今や自分の手でお金を作ることに決めたというわけか。

それは全然ちがう。この問題は別々じゃないのだ。私自身はきわめて怠惰な人間だが、つねに諸般の事情によって重労働を強いられている。政府当局が、国民からの圧力にさらされないかぎり、最も抵抗の少ない道を選ぶものであることは、私はよく知っている。国民の側の批判的な態度が必要とされ、しかもそれが非常に効果的である理由はここにある。……しかし今日のポーランドには積極的行動の機会もまた存在する。これを活用しなければならぬ。批判的な態度と積極的な行動は結びつけることができないので、ポーランド人はつまらないことにかかわる人間と大きな問題に取り組む人間にわかれなければならない。

——事業に取り組んでいる人間として、あなたは自分がつまらないことにかかわっている人間だと考えているのか？

もちろんちがう。事業というのはいつもでかい仕事だから。ポーランドでは、小さい事業でも大きな問題だ。もちろん、ほかの人間活動すべてよりも重要だという意味ではないが。〔検閲により削除〕。優秀な事業家と有能な活動家の両方が必要とされる理由はここにある。活動家はいつでも事業家のところに来てこう言うことができる。「これとこれとこれはわれわれの権利だ」。彼らは常に必要なのだ。たとえある日彼らが私のところに来て同じことを言うとしても、私のこの考えは変わらないだろう。



WYDZIAŁ NADZORZEN POCZTA 86
50zł SOLIDARNOŚCI

ポーランド社会党政治宣言

Deklaracja Polityczna PPS

【編集部注】 1987年11月15日、ワルシャワ市内でポーランド全土から代表が参加してポーランド社会党（PPS）再建会議が開かれた。会議は警察に踏み込まれ、数名が逮捕されたが、ここで以下に紹介する政治宣言が採択された。ポーランド社会党は、分割時代の1892年11月15日にパリで結成され、その後さまざまな曲折を経て1948年、ポーランド労働者党（共産党）に吸収合併されて今日のポーランド統一労働者党が結成された。

再建ポーランド社会党は、J・J・リプスキを委員長、ユゼフ・ピニオルとヴワディスワフ・クニツキー＝ゴールドフィンガーの2人を副委員長、アンジェイ・マラノフスキを書記とする指導体制で発足し、以後値上げ抗議やハンガリー、チェコスロヴァキア、ルーマニア等の反対派との連帯の声明を発表するなど活発な活動を続けていたが、本年2月14日、J・J・リプスキ、W・クニツキー＝ゴールドフィンガーらが「組織内に秘密警察が浸透、挑発にのせられて暴力を容認する路線をとろうとしている」等と主張して脱党を宣言、この指摘を否定するJ・ピニオルらと激しい対立が続いている。〔訳：篠崎 誠一〕

95年前、ポーランド社会党〔PPS〕は生まれ、独立と社会正義を求める戦いへとポーランド人を結集し、隷属の時代に独立ポーランドをめざして積極的な武装闘争に参加した。この党の影響力により働く人びとは20年にわたる兩大戦間の初期に進歩的な社会立法を得た。そしてこの党は農民運動と共に独裁傾向に抵抗した。第2次世界大戦の時期にポーランド社会党は2つの侵略者に立ち向かい、自由、平等、独立を求めて戦った。

40年前、共産主義者たちは社会主義的民主化運動を壊滅させた。多くの社会主義活動家たちがポーランド国内とソ連の監獄で命を落とし、多くが彼の地で長い歳月を送った。だがポーランド社会党は歴史の1ページからも、社会の人びとの意識からもぬぐい去られることは背じなかった。それは党の歴史とポーランドの歴史にしっかりと刻み込まれたのだ——ボレスワフ・リマノフスキとユゼフ・ピウスツキ、エドワルト・アブラモフスキとフェリクス・ベルル、イグナツィ・ダシンスキとミェチスワフ・ニュージャウコフスキ、ステファン・オクジェヤとカジミェシュ・プジャク、カジミェシュ・ケルレス＝クラウス、アダム・ブルフ

ニク、ジグムント・ジュワスキ、その他おおくの人びとによって。社会主義的伝統をポーランド社会党は異郷においても持ちつづけ、その活動の記憶はトマシュ・アルチェフスキ、アダム・チョウコスキ、そしてズィグムント・ザレムバラの名と分かち難く結びついている。

I 今日、パリ大会の記念日にあたり、われわれはポーランド社会党を再建する。われわれはこれから受け継ごうとする伝統の重みを十全に意識している。これは憲法にのっとった公然の合法的な政党である。われわれの党が合法的に存在する権利はまたポーランド人民共和国政府の批准した国際法の規準からよって来たるものでもある。

II われわれは、いまや「社会主義」という言葉が共産主義者たちに不当に占拠されており、現在のポーランド社会においては人気を博さないであろうことは理解している。それは権力と同一視されている。われわれは、われわれの働き、闘い、そして創造的発想によりこの言葉にふさわしい本来の意味を取り戻すであろう。これら諸価値、人間の主体性、労働の尊厳、そして民族の自立——

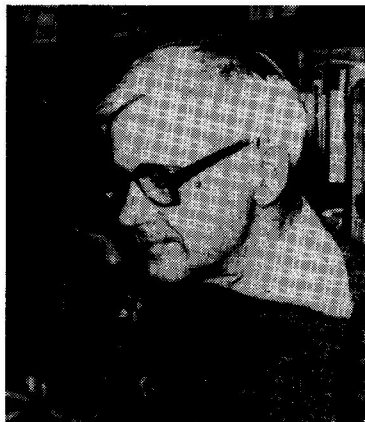
これらはポーランドの社会がいくたびも求めつづけ、ポーランドの働く人びとが8月の反乱の時に求めたものである。これらは「8月」から「12月」までの間の自立した社会勢力の活動の中にあり、第1回「連帯」全国大会で採択された「自治共和国」綱領にみずからの言葉を得た。自由、民主主義、社会正義を求めてポーランドの社会主義者たちは70年代と80年代、反対派組織の中で闘いつづけた。

Ⅲ われわれがポーランド社会党の設立にとりかかる今この時、支配者たちは経済の再建と体制の民主化の意志を明らかにしている。かれらの提出した経済プログラムは、以前に反対派や自立した学者たちによって示された提案を多く含んでいるものの、しかし一貫性を欠き、そして何よりも働く人びとの大多数の権利と利益にとって脅威を生みだすものである。したがって現在の状況における問題の鍵は、自立した社会運動がポーランドの政治生活に現実の影響力を持てるか否かにある。われわれは、当局に対抗する現実的な政治活動が今や可能であると考ええる。

Ⅳ われわれの綱領は、時間と生活の現実によって修正が加えられる開かれたものになろう。われわれは硬直した教条を基礎に据えようとは思わない。われわれはまた特定のいかなる哲学とも関わりを持たない。とはいえ、われわれにどってカトリック教会の社会科学、とりわけヨハネ・パウロ二世の教えの方がマルクス主義よりも近いことを隠すつもりはない。哲学は個人的興味の領域と研究機関の専門分野に任せるべきであり、政党が口を出すべきではない。われわれは、宗教的信条は各人の個人的問題であることを認め、ポーランド社会党はその党員に対していかなる制約も設けない。

Ⅴ われわれは何よりもまず自由に組織される集団の連帯の努力に期待する。しかしわれわれは個人的イニシアチブの大きな力をまた失なうわけにはいかないことを理解している。

Ⅵ ポーランド社会党は世界のあらゆる諸民族との協働と友好をめざす。とりわけ、われらが隣人たちとの違いとお互いの反目をそれぞれの自決権を認めることによって克服することをめざす。



再建ポーランド社会党委員長 J・J・リップスキ

われわれはポーランドのすべての少数民族の自由な文化的、宗教的發展の保障をめざして活動したいと願う。

Ⅶ われわれはすべての民主的政党および組織との協働を願う。われわれは再生しつつある農民運動に期待の目をそそぐ。

Ⅷ 政治の現実を無視するわけにはいかない。それは変えられるし、変えるべきである。ポーランド社会党はポーランドの権力執行に影響を与えることをめざす。それは民主化の推進と発展、権力の行動に対する社会的監視の組織化、再生しつつある組合運動の支持との密接な協同関係の確立によって現実のものとなろう。われわれは人権の尊重——独立した自由な国で生きる権利、結社の自由の権利、政治的多元主義の権利——をめざして闘うだろう。われわれは、自然環境の破壊なしに生きる権利、兵役に代る代替服務の自由、死刑の廃止を要求する。われわれは、民主的左派の理念を共に抱くすべてのポーランド人に対してポーランド社会党の隊列に加わるよう呼びかける。

独立・民主ポーランド万歳

ポーランド社会党万歳

1987年11月15日

地の精と革命とトイレットペーパー

ヴロツワフの「オレンジ・オルタナティブ」

Gnomes, Revolution and Toilet Paper (Or the Orange Alternative in Wrocław)
Uncensored Poland News Bulletin No.2/88, 22 Jan. 1988, London

【編集部注】 ヴロツワフで新しい形の試みが注目を集めている。「少佐」と呼ばれる人物を中心とした「オレンジ・オルタナティブ」グループがひき起こす“ハブニング”がそれである。以下に紹介するコラージュ風の記事は地下紙『週刊マゾフシェ』232号（1987年12月16日付）に掲載されたもので、同グループのまいたビラの文面の一部やヴロツワフの地元情報紙の記事が巧みに折り込まれており、読み物としても仲間面白い。

ヴロツワフの街にときおり、奇妙なビラが大量に現れる。たとえば12月の初めには――

シフィドニツカ通りにサンタクロースがやって来る!!! 毎年、灰色の冬が訪れ木の葉が綿毛のような雪におおわれるころ、クリスマスツリーのかげの小さな小屋から、大きな袋をかついで彼は現れる。今年のサンタは例年よりも仕事がたくさんだ。人々が笑いとささやかなプレゼントを必要としている場所ではなおさらサンタは忙しい。そういうわけで、今年サンタはヴロツワフを訪れることになった。仲間クマさんやいたずらな地の精も一緒だ。彼らはまたたく光とクリスマスの飾りをふりまいてくれるだろう。

親愛なる通行人のみなさん、楽しいプレゼントのチャンスです。最近の出来事によれば、われわれは将来楽するために今は辛抱しないといけないそうだから。

12月7日午後4時、シフィドニツカ通りでサンタを歓迎しよう。さびしさをふきとばすために、みんなサンタの格好をしよう。何か目新しい、素敵なることをしよう。さあ、聖人たちの時計の下に集まろう。クリスマスの飾りやモミの枝を持ちよって、地下道を飾ろう。飾りつけという立派な仕事をして、市当局を助けてやろう! 楽器を持って来よう。新しいありかたで新しい意識を形成しよう!!!

大学の門から、「少佐」ことヴァルデマル・フイドリフ扮する悪魔が、斧をかついだサンタと並んで意気揚々と登場する。彼らはこの日のスローガンを書いた横断幕を掲げている。いわく「サンタクロースは改革の希望の星」。だが結局はこの希望の星も幻にすぎないことが判明するだろう。彼らが与えるプレゼントといったら直筆サインだけなのだ。15分後、アヴァンギャルドのサンタと悪魔はシフィドニツカ通りの地下道に到着。2人はそこで警官に止められ、一時拘束される。そのあいだに、シフィドニツカ通りでダンス・パフォーマンスが始まった。13人の若い男がロープで互いの身体をしっかりと結びつけ、大蛇のようになって踊っている。このため警察は拘束しようにもできない。2000人を超す群集は「サンタクロースを釈放しろ!」と叫び、警官たちに圧力をかける。警察のバンはキャンデーの集中砲火を浴びている。警官の動員数がいつもより少なかったこともあって、この反撃は成功した。

30分後、浮かれ騒ぐ群集は縦隊を形成して、旧市街にある地区警察本部へ行進した。ここでは敵は数を頼みに人々を捕えにかかった。道の両端がふさがれ、警官隊が群集を直接襲った。人々はシフィドニツカ通りの地下道に戻って陣形を立て直そうとしたが、すでにそこも警察に封鎖されていたため果たせなかった。



トイレトベーパーパンティーガードルよ、安らかに眠れーハブニングートイレトベーパーを怖がっているのは誰」にて

この場所でのこうした出来事はこれが初めてではない。シフィドニツカ通りは、仕事を終えて帰宅する人で午後は混雑する場所である。これらのハブニングを企画しているのは「新文化運動」またの名を「オレンジ・オルタナティブ」と呼ぶグループである。急速に発達したこのハブニングの最初は、「地の精」パフォーマンスであった。

あなたの独白の「地の精の帽子」をかぶって出てきて下さい。社会主義シュールレアリスムに栄えあれ!! 世界平和軍がマーシャル・アーツ(武術)の下に栄えんことを!! ソルボヴィト(ひどい味のソフト・ドリンク)万歳!!

こうして、国際児童デー(6月1日)には赤い帽子をかぶった地の精が何人も現われ、踊ったりキャンデーを配ったりした。つづいて、次のようなハブニングが起こった。

——9月1日の反戦デモ。

——10月1日の「トイレトベーパーを怖がっているのは誰?」と題するハブニング。

——10月7日の「警察と公安警察の日」(公式

に定められた日である)に行われた、「独立警察官の日」という行事(冗談でなく本当に)。

——10月12日(ポーランド人民軍の日)の、「マヨネーズの中のメロン」と題する大演習。

——11月6日の、ソ連十月革命前夜祭。

——11月27日の、経済改革に関する国民投票の際の「ヴロツワフ、100(200)パーセント動員の町(「イエス」と2度言おう)」と題するハブニング。その時のビラは次のようなものだった。

ヴロツワフ市民のみなさん! われわれの置かれた状況は昨日の時点でもまだ不明瞭だったが、今日、人民の政府はわれわれに、大きく両手をひろげる歴史的な歩み寄りを見せた。今日とそして明日には、明確な「イエス」がわれわれにもたらされる! 正直に自らに語りかけよう。そう、「イエス」を2回、繰り返して。投票者数の何倍もの「イエス」。イエス! エゴイズム打倒、反発はやめろ、国民投票はわれわれのもの、値上げなんかへっちらだ。イエス! このすばらしい民衆の祝日に支持を表明するためにデモを組織しよう。11月27日金曜日午

後4時、シフィドニツカ通りの聖人時計の下に集まろう。「ヴロツワフ、100 (200) パーセント動員の町」のスローガンを掲げ、民衆協議会を行おう。他のスローガンも歓迎。たとえば「今日の投票、明日の規律と幸福」など。(……)

ヴロツワフの一連のハブニングの製作・監督・舞台監督を務めるのが、「少佐」である。彼は34歳、ヴロツワフ大学卒で歴史学と芸術史学の学位を持っている。ヒゲは伸び放題、いつも友人にももらった古着を着ている(今年の冬は、まるで舞台衣装といった方が良いようなネービーブルーのトレンチコートに皮の飛行帽といういでたちだ)。「少佐」ははにかみ屋でとても真面目な男である。次に紹介するインタビューの際には、翌日の「サンタクロース」の準備に疲れ果てていた彼は、今にも居眠りしそうであった。

* * *

「少佐」 僕はいろんなことを、ちょうどピーズを糸に通すように、まとめている。僕たちはあるきっかけを作り、それから即興的に出来事を進めてゆく。「十月革命」を例にとろうか。僕の手もとに、前のハブニングで使ったキャンパスの布がいくらか残っていたので友人のグループにあげたら、彼らはそれで戦艦ウロラを作った。6~7メートルもあろうかというじつに大きな模型で、旗や砲もついているやつだ。別のグループは全く独自の発案で、ボール紙製の戦艦ポチョムキンをこしらえた。また別のグループは、これまた勝手に赤軍の帽子を作ったし、POLAR工場の人たちは木工細工でカービン銃を製作した。こうして、カービン銃と旗を持った紅衛兵はレオン・トロツキーの復権を要求し(西ドイツの記者はこれを見て、僕らのハブニングをトロツキストの大衆集会と間違えたんだ)、赤軍の帽子をかぶった騎兵は木馬にまたがって登場した。また、エリツィン(解任されたモスクワの党書記)の復職を求めるスローガンを書いた旗もあったし、公安警官に1日8時間労働を、という要求もあった[公安警官が「反体制派」取り締りのため、長時間勤務や休日出勤をしていることを皮肉ったもの]。祝歌を歌う人

々もいた。その人たちは先端に赤い星をつけたステッキを1本と、「赤いボルシチ」と書いた旗を掲げていた。これは、僕らがこのハブニングへの参加を呼びかけるピラの中で、革命前夜祭のディナーを近くの大衆食堂「バルバラ」で食べよう、と書いたことへの応答だ。僕らが前夜祭を祝ったのは、革命記念日がちょうど土曜日にあたって、人通りが少なくなるからだ。

この「十月革命」を準備するために、しめて2週間(これは以前のハブニングと同じ期間だ)、4度のミーティングが行われ、そして何十人かの人々がそれぞれ数時間を費した。でも最近ではみんなも慣れてきて、準備に前ほど時間がかからなくなった。必ずしもグループで行動しなくても、シフィドニツカ通りでひとりでも何かすることができるようになった。小道具のことではちょっと問題がある——僕らは何でも手当たりしだいひつつかんで使ってしまうから。一番の頭痛のタネは、ピラの印刷屋に払う1万ズウォティの調達と、期日に間に合うよう印刷屋のシリをたたくことだろう。

トイレットペーパーを怖がっているのは誰？

(……) 全世界を席卷し始めた社会主義シュールレアリスムの時代たる現在、トイレットペーパーは外交の領域に属する。つまり、ポーランド公衆衛生の白い象の白書の領分なのだ。

(……) 社会主義は、その無茶苦茶な商品分配と常軌を逸した対社会政策とにより、トイレットペーパーを人々のあこがれの的にまつりあげた。

進歩的思想の命じるところに従って、10月1日午後4時、シフィドニツカ通りに集まろう。自分のトイレットペーパーを持って来て、行動しよう。トイレットペーパーで、独立した社会的作品、心理学的、生理学的、宇宙論的、可動的作品を創造しよう。シェービングクリームもお忘れなく、また洗面所のタオルにも日の目を見せてやろう。洗面所タオルは嵐のような現実のさかまく水流に浮かぶゴンドラだ。制服の紳士および制服を着ていない紳士諸君、パンティーガードルのために声高く発言しよう。

午後4時、そっとトイレットペーパーを取り



「マヨネーズの中のメロン」にて、右のプラカードには「ワルシャワ条約、平和のアンギールド」とある。

出し、少しずつちぎっては通りかかりの人に配ろう。公平に分かち持つのだ。トイレットペーパーから正義を始めよう。シフィドニツカ通りの中央に鉄製のポールが立っている。スプーンを持参し、パンティーガードルのためにこの鉄のポールをスプーンでたたこう。(……)

最後にクイズをひとつ。トイレットペーパーを求める行列は、次のうち何を表現しているでしょう。a) 文化への欲求。 b) 生理的欲求。 c) 発達した社会主義社会における党の指導的役割。(正しいと思うものに印をつけよ)

「少佐」 僕が自分に課しているのは、自分のさまざまな弱さを克服すること、そして他の人が弱さを克服するのを助けることだ。とりわけ、警察に対する恐怖にうちかつこと——これにより、より多くの人が戒厳令の悪夢から解放される。これは政治的変化じゃなく、心理的変化の問題だ。そうすれば、あとあとになって、いろんな形で結果が出てくるだろう。

* * *

通常、ハプニング参加者とみなされると留置場送りになる。その数は100人かそれ以上のときもある。留置場の中でも彼らはどんちゃん騒ぎを続け、数時間後に全員釈放される。

しだいに人々の方も警察との付き合いに慣れてくる。十月革命前夜祭のときなど、ブタ箱から出された人たちは公安警察官に「ごきげんよう!」「楽しい夕べをありがとう!」とシュプレヒコールを送った。つられて何人かの公安警官も「ごきげんよう」と叫び返したほどだ。「独立警察官の日」の雰囲気には、ほとんど牧歌的でさえあった。学生や市民の行列が、「警察官の日にあたって——グロツワフの青年たち」と書いた旗や5m以上の長さの造花を掲げて、シフィドニツカ通りと旧市街広場を往復した。ギターがかき鳴らされ、バトカーも警官も私服も花束や飾りでおおわれた。「ハッピーバースデー」を歌いながら踊っていたグループは1台の警察のバンをとりかこむと、「一緒に来いよ!」と叫びながらダンス大会を始めた。このときは「少佐」だけが拘留された。彼は肩に巨大な地の精の人形を乗せて交通整理にあっていたのだ。信号が青に変わるたび、

彼は手にしたシンバルをうち鳴らし、道の反対側の人物が、歩行者が横断歩道を歩調を合わせて渡れるようにドラムをたたくというあんばいだった。

12月7日の「サンタクロース」の時は、何人かのサンタを拘束してパトカーへ連行した公安警官までが、お祭りに参加した格好になってしまった。

* * *

「少佐」 シフィドニツカ通りを戦場として、自由の名のもとに赤い帽子をかぶった人々と、生活上の必要を満たすことを旗印とする青い帽子の人々が戦うんだ。(……) ポーランドの独立をめざす伝統には、侵略に対し自衛するために国民軍の召集とか、または、やる気になった個人による組織化されない運動といった考え方があ

万歳!! 戦いの日の厳粛な命令 われわれはウルトラ・アカデミー学長司令官閣下の名により、10月12日、秋の大演習をコードネーム「マヨネーズの中のメロン」として行うことを布告する。軍部隊の集結地点はヴロツワフの八目につかぬ街角。当該大演習はポーランド人民軍記念日にあわせて行われる。それゆえ、1600時にシフィドニツカ通りで大パレードを催す。

パレードのスローガンは「ワルシャワ条約、平和のアヴァンギャルド」。

* * *

以下は「シュコワ (学校)」誌に掲載された「少佐」とのインタビューである。

——「社会主義シュールレアリスム」という語であなたは何を表そうとしているのですか。

「少佐」 社会主義シュールレアリスムとはわれわれが生きているこの現実です。今われわれを、ここで、この国の中で、とりまいてる現実。

——「ハプニング」とは何ですか。

「少佐」 ハプニングとは、たまたまあるきっかけで起きることです。その原則は、既製の規範を打ち破ることです。打ち破る相手は、行動規範でも芸術の形式に関する規範でもかまわない。恐怖心も一種の規範だし、無気力もそうです。ヴロツワフでの一連のハプニングは、とりわけ国家によ



「楽しいイースターを。」

って作られた規範を打破してきました。

——あなたは、われわれを支配している体制の全体主義を暴くためにハプニングを起こしているのですか。

「少佐」 私がハプニングを起こすのは、ハプニングを起こすためです。

——でも、人が何かをするには理由や目的があるはずでしょう……。

「少佐」 うん、そうですね。地の精のハプニングを準備していたときは、お菓子やリボン飾りで楽しい時間を過ごせるだろうと考えていました。

——じゃあ、楽しい時間を過ごすためにだけ?

「少佐」 いや、そのためだけというのではなく、われわれの生きている現実世界というものにさぐりを入れるためもありましたね。

——でも、何が起るか大体的見当はついていたでしょう。

「少佐」 そうでもありませんよ。警察が地の精を拘留するかどうかは予想できなかった。結局は拘留しましたね。

* * *

「少佐」を驚かしたのは、赤い帽子をかぶって走り回ったり、「トイレットペーパーよ 安らかに眠れ」とか「政府（のお尻）だってふきとれる」などと書いた旗を掲げたりすると反体制派がバカに見えてしまうと考える人々が存在したことだった。そう考える人がいたら——それはその人々自身の問題だ。通りは天下の公道であって、誰のものでもない。ハプニングばかりで政治的行動がなさすぎるという類の考え方は——そう、要するにそれはコミュニストの考え方だ。

今日、オレンジ・オルタナティブに敵はほとんどない。ユゼフ・ピニオルはいつも熱心な参加者だし、最近のハプニングにはヴワディスワフ・フラシニウクの前も見られたという（ピニオル、フラシニウクはともにヴロツワフの「連帯」の中心人物）。

ブラウダはわれわれを自由にする（注：この部分はロシア文字で書かれていた。ブラウダはロシア語で「真実」の意。）（……）同志諸君、労働者人民階級の受動性を打破する時が来た！ 十月革命記念日前夜祭を祝おうではないか。11月6日午後4時、シフィドニツカ通りの「歴史時計」の下に集結しよう。

同志諸君、とっておきの赤い服を着て来たまえ。赤い靴、赤い帽子、赤いスカーフを身につけたまえ。（……）もし赤旗が手に入らぬなら、せめて真赤なマニキュアをしたまえ。赤い衣装が手持ちになれば、ケチャップのかかった赤いフランスパンを買いたまえ。われわれ「赤党」は赤い顔、赤い髪、赤いパンツに赤い口紅で当日4時に時計の下で待つ。

同志諸君、十月革命祝賀集会で会おう！！ レーニン主義とトロツキー主義の理念と実践よ永遠なれ！！

——人民委員評議会

* * *

「少佐」 僕がまだトルンの高校に通っていた頃のことだ。ある日僕は、他の生徒と全然違う格好で学校へ行った。つばの狭い中折れ帽にステッキとアタッシュケースといういでたちで。級友たち

とあらかじめ打ち合わせしておいたので、僕が教室へ入るなり全員が気をつける姿勢をとった。僕は教師のところへ行き、授業記録簿を受け取り、授業視察に来た視学官だと名乗った。そして一番後ろの席に座り、記録簿に何かを走り書きしたり、採点をチェックしたりした。授業が終わると再び教師に歩み寄り、良い授業だったとほめ、立ち去ったんだ。校舎を出る時、生徒の制服チェック担当の教師が僕に気をつける札をしてくれたよ。

次はメーデーの時だ。僕の家窓の下で、パレードに参加するグループが集合しているのが見えた。（……）テレビをつけたらプレジネフはじめお歴々がひな壇に並んでいるのが映った。そのとたん、あるアイデアがひらめいた。僕はよそゆきの服に着替え、小さなびんをいくつか持ってパレードの演壇へ向かった。演壇の警備の警官には、父に心臓の薬を届けに来たと行って通してもらった。僕の学校の代表団が行進して来たところで、僕はそこいらの花をかきあつめては下の人たちに投げはじめた。後になって校長は、自分の面子を守るために、僕が青年ジャーナリストサークルの代表として演壇にいたことにしてしまった。（……）こうして僕は社会主義シュールレアリスムの実践を始めたわけだ。

（……）兵役を逃れるべく、僕は精神科のクリニックに出頭した。医者に、僕はポーランドの精神医学の水準を高めるんだと言ってやった。また、ある時は「僕はすてきな将校用ブーツを持っているんです」と言い、ある時は「僕は重要人物なので、いろんな勢力が僕の失脚を狙っている」と言ったりした。ある日ヒゲをそってサングラスをかけて医者との面接に行ったら、彼は僕をしっかりとばしたんだ。サングラスははずして来い、私の方が君より偉いんだぞ、ってね。それ以来僕は彼を「大佐」と呼び、自分のことは「少佐」と称するようになった。これが「少佐」の由来さ。

（……）それから、心理療法のサマーキャンプに行った。僕はそこではもう「少佐」で通っていて、軍事演習を指揮した。みんなそういうものに飢えていたんだ。おもちゃの鉄砲やプラスチックの剣を買い、紙でヘルメットを作り、いかに組んで「アンチ心理療法号」と名付けて海に浮かべ

た。食堂の食べ物やコックさんたちを狙い撃ちし、砂丘に外人部隊を設立した。サマーキャンプには、精神に不調をきたした共産主義青年活動家も何人か来ていた。こいつらがミーティングのときに、「君らのやろうとしていることなどできるわけがない、外人部隊なんて資本主義の産物だ」と叫んだんだ。つまり、そのキャンプには本当の病人もいたってことだ。でも、僕と一緒に演習した仲間みんな僕みたいな兵役逃れか、大学に長くいたためにちょっと休暇をとろうって連中だった。そう、だから、結局、病人は正常なつもりでいて、まともな人間が異常なふりをしているってことだ。そのふたつの世界がどういうわけかうまいこと共存していた。1979年のことだ。

* * *

1980年8月のスト以前、「少佐」は学生連帯委員会の一員で、すでにグロツワフでの様々なハプニングにかかわっていた。だがその当時のハプニングには今のような洒落っ気はおよそ見られなかった。「思うに」と「少佐」は言う「もしあの頃、今みたいなどころまでやっていたら、僕は刑務所送りだったろうね」。

* * *

「少佐」「連帯」ができる、僕はそのクライアントになった。というのも、1980年に社会主義シュールリアリスト新聞の編集発行を始めたから。この新聞はAAと呼ばれていた。大学がストライキに入ると、警察が僕らのポスターの上に紙を貼ってまわるようになった。そこである晩、僕らは走って出てゆき警官を取り囲んで『スト・ラト（100年生きよ、と相手の長寿を祈る祝い歌）』を歌った。別の時は『インターナショナル』を歌った。街頭でもいろいろちよっかいを出した。糊貼りしている警官の写真を撮ってさっと逃げてはまた戻ってくる、そうやってゲームが始まる——。僕たちは大学の哲学部を「第一特」と呼んで、革命司令部を置き、機関誌『オレンジ・オルタナティブ』を編集した。『オレンジ・オルタナティブ』は主に芸術を扱う雑誌だったが、あの状況下では芸術とて政治的だった。



1982年、僕たちはあちこちの壁に地の精の絵を描いてまわった。1983年にはすでにハプニングを始めていた。紙で警官の制服を作って着込み、横断歩道のところ立って交通整理を試みたんだ。あの頃のことだから、それは奇妙に見えた。地の精を描いたり警官の扮装をしたり時には何人かの仲間がいた。1980年以来の仲間だ。この古顔の何人かは今でも顔を出す。今は新しい人々が「自由と平和」運動や「連帯」や「戦う連帯」をはじめあらゆる政治領域から参加している。統一労働者党員すら1人いる。僕にも、誰がどこの団体から来ているのかわからないことがよくある。でも、政治団体がどこであれ僕は気にしない。

* * *

とりあえずは、これで ジ・エンド

[訳：高橋 初子]

ヤルゼルスキ將軍とワレサ「連帯」委員長への公開状

イエジ・ホルツェル

Professor Holzer's Open Letter to Gen. Jaruzelski and Lech Wałęsa
Uncensored Poland News Bulletin, No. 3/88, 4 Feb. 1988

【編集部注】 著者は『「連帯」の歴史』という著書もある歴史学者。ただし「連帯」活動家ないし顧問ではない。この公開状の送付を受けた3紙のうち、地下紙『週刊マゾフシェ』は本年1月6日付の紙面で、政府系週刊紙『ポリティカ』は同16日付の紙面でこれを公表したが、カトリック系合法紙『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』だけは検閲のためいまだ掲載できないでいる。『ポリティカ』紙は、「著者の提案は非現実的である」とする副編集長ジグムント・シェリガ署名の長大なコメントを付している。〔訳：湯川 順夫〕

拝啓。ポーランドの情勢はこの10年間悪化し続けています。国民投票から10日経った現在、その政治的、イデオロギー的立場や職業、教育を問わず、多数のポーランド国民は、わが国が危険でまったく悲劇的な事態に陥っていると認識始めています。危機とそれに続く低迷が終了するという展望は見えていません。わが国は、発展段階から言えば、中進国のレベルから後進的な文明の国へと急速に転落しつつあります。1980年の「連帯」の結成も1981年の戒厳令の導入もいわゆる改革の第1段階の活動もこの過程を阻止できませんでした。国民投票にみられるように、いわゆる改革の第2段階も国民多数の支持を得ていません。

今や過去の責任の所在を云々することは重要ではありません。重要なことはただひとつ、ポーランドの将来に影響を及ぼすことができる人々が理解に努めて会合し、たとえ数年かかっても自らの偏見ならびに見解や利害の相違を克服することです。こうした偏見や相違は深刻なものです。現実の前ではその意味を失いつつあります。たとえそれが専門家の理論的、実践的知識を一杯に盛り込んだものであったとしても、経済上の構想のみによってポーランドをこの低迷から引き揚げることは絶対に不可能でしょう。

その試みにもかかわらず、戒厳令の導入以降当局は国民の多数の積極的な支持を得ることに成功していません。1980～81年にあれほど大きな支持を得ていた「連帯」も、現在は少数の活動家に依

拠しているにすぎません。しかしながら、国民の大部分は、次第にその望みを失いながらも、当局や「連帯」からの提案を待ち続けているのです。

今や、両方の代表が前提条件抜きで善意で会合するための最後の試みを実行すべきときです。ここで肝心な点は一方が他方に対して勝利するといったごまかしの協定を結ぶことではありません。われわれには1970年と1980年の経験があります。それから年月を経た今日から見ると、政治的勝利の結果が国家当局と社会集団との間の不安定な均衡を作り出す場合には、そうした勝利は虚構にすぎないように思われます。国家が社会の生活を規制することができないからです。社会の側も合理的、効率的に機能する国家を欠いているために問題を解決できません。

今日、わたしたちは、その性格は異なるとはいえ18世紀のポーランド人と同じ規模の危険に直面しています。共同の努力を通じてこの破局を封じ込めることが可能な場合に、この試みを組織した人々を歴史は決して忘れないでしょう。

国家評議会議長ならびに「連帯」委員長、ポーランドの将来はわれわれすべての手にかかっています。われわれ市民たちはあなたがたからのイニシアチブを期待し続けています。カトリック教会のモラル的後押しの下で共同の努力を通じて歴史の歯車を逆転させる潜在的可能性をもっているのはあなたがたなのです。どうか、社会と国家の真の利益にかけてこの試みを実行して下さい。

ポーランド日誌

1988年1月16日～2月16日

1月16日 ディーゼルエンジン用の軽油不足のため鉄道が大幅な間引き運転、と伝えられる。

1月17日 ワレサ「連帯」委員長ら6名のノーベル賞受賞者がアウシュヴィツ強制収容所跡を訪問。ワレサ委員長は、パスポート発給を拒否されてパリで開催予定のノーベル賞受賞者会議に出席不可能に。

1月18日 政府機関紙「ジェチオスポリタ」とのインタビューで、官製ジャーナリスト協会のA・ホフゼン議長、「ポーランド国民の30%が今なお報道の正確さを信用していない」と語る。

1月19日 パリのノーベル賞受賞者会議でワレサ委員長のメッセージが読み上げられる。ウルバン政府スポークスマン、定例外国人記者会見で、軍務に代る代替服務制度を検討中と語る。PRON〔体制翼賛統一戦線組織〕全国評議会が地方選挙法改正案を批判、「もっと民主的に」と主張。

1月20日 政府、OPZZ〔官製労組全国評議会〕の要請を容れて、物価値上げと引き換えに、6,000ズオティの値上げを約束。クラクフのソ連領事館にアフガニスタン介入抗議のデモを行った「自由と平和」の6名が拘留される。KOR〔社会自衛委員会〕および「連帯」協力者のチェリスト、J・クレコフスキに対し政府は3度パスポートの発給を拒否。

1月21日 ポーランド国会、国営企業の平均賃金を3万6,000ズオティに引き上げる計画を承認。

1月23日 PAP通信によれば、昨年1年間のポーランドのタバコ消費量は1,000億本、子供も含めて国民1人あたり2,700本を吸ったことになるという。ポーランド製タバコの質の悪さも指摘されている。

1月25日 シロンスクの「連帯」指導者A・グルヌイが離婚した妻の証言もないまま「配偶者扶養義務不履行」により1年半の禁固刑判決を受ける。K・モラヴィエツキ逮捕後「闘う連帯」を指導していたA・コウォジェイがグダンスクで逮捕される。「ニューヨーク・タイムズ」によれば、テロリスト組織アブニダルが4年間にわたりポーランドで資金調達活動を行い、ポーランド政府はこれを黙認、援助していたという。

1月26日 再建ポーランド社会党が値上げ反対の声明。ウルバン政府スポークスマン、ポーランド国内におけ

るアブニダルの資金調達活動を否定。

1月27日 「ポーランド農民党」が再建宣言。暫定議長はスタニスワフ・ヤニシュ。

1月28日 ワルシャワ放送によれば、ワルシャワだけでも17万人が電話の敷設を待っているという。

1月29日 2月1日から40%以上の値上げの報に、商店やガソリンスタンド前に買いだめの長い行列ができる。西ドイツ国境警備局の発表によれば、今年に入ってから西ドイツに亡命を求めてきたポーランド人はすでに1,031名に達するという。

1月30日 政府コミュニケ、2月1日実施予定の値上げ計画を正式に発表。基礎的食料品40%、ガソリン60%、ディーゼル油100%、アルコール類46%、タバコ40%、家賃50%、等。4月1日からは、石炭200%、電気・ガス・地域暖房費100%の値上げが予定されている。これに伴い賃金は平均6,000ズオティ引き上げられる。

1月31日 「連帯」全国執行委員会とワレサ委員長、値上げ抗議の声明を発表。グダンスクで約3,000名、ワルシャワで約1,000名が値上げ抗議の街頭デモ。

2月1日 ワルシャワで再建ポーランド社会党がルーマニア連帯デモ。Z・ブヤク、J・J・リプスキ、Z・ヤナス、J・ピニオルら50余名が一時拘束される。ハンガリーのブタベストでも約300人がルーマニア大使館前でデモ。チェコのプラハでも憲章77グループによるデモが予定されていたが警官隊によって阻止され、数名が拘留される。Z・ブヤク、J・バルビツキら「連帯」指導者が「公共の秩序擾乱の試み」について警告を受ける。J・オニシケヴィチ、J・クーロン、T・マゾヴィエツキ、B・ゲレメクラにも召喚状が。この日、著名な経済学者、社会学者、歴史家の研究グループ、「改革と民主主義」が発足を宣言。メンバーにはR・プガイ、C・ユゼフィアク、T・コワリク、J・シヤチキ、W・ヴェツォウォフスキ、H・サムソノヴィチ、K・クレステンらの名前が。グループはポーランドの「自由主義左派」の伝統にのっとり、労働組合の複数制、結社の自由、広範囲の自主管理システムを支持し、「戦略的計画体制と結合した市場経済システム」をめざすという。ポーランド滞在中のホワイトヘッド米国務次官、オジェホフスキ外相、チレク、ラコフスキ各政治局員、サモイリク蔵相らと会谈、両国関係の正常化について協議する。ズオティの19%切下げ、公式レートは1ドル=380ズオティに。

2月2日 ウッチで約300、ノヴァファタで約1,000の労働者が値上げ抗議のデモ。ポーランド訪問中のホワイ

トヘッド米国務次官、ワレサ「連帯」委員長、ドンブロフスキ司教会議秘書らと会談。ウルバン政府スポークスマン、定例外国人記者会見—値上げ抗議デモに関する西側報道はデタラメである、「改革と民主主義」グループの宣言は、まじめだが誇張がある、ホワイトヘッド米国務次官との会談は「非常に建設的」である、等々。

2月3日 ホワイトヘッド米国務次官、5日間のポーランド訪問を締めくくる記者会見。「人権の分野での前進を強く印象付けられた。しかしまだいくつかが問題は残っており、今後の両国関係の進展はその解決いかんにかかっている」。

2月4日 東ドイツにおける反対派弾圧に抗議して、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア、ソ連の市民が署名した声明が発表される。グダンスク、ワルシャワ、ノヴァフタで値上げ抗議のデモ。ブリュッセル訪問中のラコフスキ政治局長、ソ連のベレストロイカはポーランドにおける「連帯」の扱いを何ら変えるものではない、と語る。

2月5日 社会主義諸国向けポーランド航空運賃が30%引き上げられる。スウェーデンのラジオによれば、ポーランドはバルト海地域で最大の環境汚染国であり、ここに放出された窒素の3分の1、硫酸塩の半分以上がポーランドからのものであるという。

2月7日 ワルシャワで再建社会党（PPS）指導者のJ・J・リプスキ、W・クニツキ=ゴールドフィンガーら5人が拘留される。クラクフで値上に抗議して1,000名以上がデモ。

2月8日 ビドゴシチで「自由と平和」の活動家、S

・ドトキエヴィチの釈放を求めて約200名がデモ、13名が拘留される。ノヴァフタのレーニン製鉄所で数千の労働者が月1万2,000ズオティの生計費補償を求める請願に署名。同様の請願はウルスス・トラクター工場でも。ポーランド航空、対西側航空運賃の28%値上げを発表。チェコのヤケシュ新書記長ポーランド訪問のためワルシャワ着。

2月10日 モスクワ訪問中のオジェホフスキ外相、シェワルナゼ外相と会談。ポーランド資料文化センターの設立合意書に署名。同外相と会談したゴルバチョフ書記長、「ソ連—ポーランド関係の歴史には否定的な時期があった。問題を全体の文脈の下で説明しなければならぬ」と語る。

2月12日 タス通信がソ連—ポーランド外相会談のコミュニケを伝える。「両国はワルシャワ条約の枠内で一層協力関係を深める」。

2月13日 ワレサ委員長、ICFTUメルボルン大会への招請を受諾。「両国、国際情勢ともに『連帯』の国際労働運動への復帰に有利になっている」と述べ、パスポート入手に全力を尽くすと語る。

2月14日 J・J・リプスキら再建ポーランド社会党指導者4名が「党は入り込んだ秘密警察の挑発に乗せられている」として脱党を宣言する。党執行委員会の12名のメンバーが、問題は党内で議論されるべきである、と4人を批判する声明を発表。

2月16日 ヴロツワフでオレンジ・オルタナティブ・グループ〔本誌10頁以下を参照〕主催のパフォーマンスに参加した約150名が拘留される。

〔編訳：水谷 聡〕

編集後記

☆オーストラリアのメルボルンで開催された国際自由労連（ICFTU）大会に参加しようとしたワレサ委員長に対し、ポーランド政府はパスポートの発給を拒否しました。その理由がふるっています。「レフ・ワレサ……らの旅行は、ポーランド人民共和国の基本的な政治的利益に反し、ポーランドの法秩序を嘲笑するものである」（ウルバン政府スポークスマン）。

☆ヤルゼルスキ政権はこの間、その「正常化」路線の仕上げとして国民の海外渡航の自由化——パスポート発給条件の大幅緩和——を強調していましたが、

馬脚をあらわしたというべきか。

☆ゴルバチョフ書記長のユーゴスラヴィア訪問。いわゆるブレジネフ・ドクトリンが事実上撤回されたことと大きく報道されました。「両国関係史の空白の見直し」も合意されたとのこと。第2次大戦中のチトーのバルチザン闘争とスターリンの路線の衝突にまで光があてられるのかどうか。「ポーランド—ソ連関係史の空白の見直し」は政府間レベルで進行中とのこと。どんな成果が出てくるか。

☆財政危機対策のひとつとして、本号から試みに減頁、しばらくの間20頁建てとさせていただきます。ご了承下さい。本格的な財政危機対策を検討中、それが決まるまでのいわば暫定措置です。3月23日み



「命を助けてやれば3つの望みをかなえてくれるって？
それじゃあ、タバコ1箱、マッチ1箱、それから
『エクスプレス・ヴィエチュルヌイ』(人気のある夕刊紙)
をたのむよ。——なんとつましいポーランド人の望み。

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research

事務所は月・水・金 14:00~17:00

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)